

第3回「子母澤寛文学賞」「愛猿記賞」の選評

選考委員長 佐藤勝彦

令和3年（2021年）7月から令和4年（2022年）3月にかけて募集を実施した第3回「子母澤寛文学賞」（短編小説部門）、並びに「愛猿記賞」（エッセイ部門）に多数の方々のご応募をいただきました。

心より御礼を申し上げます。大変にありがとうございました。

今回は、短編小説部門で138作品、エッセイ部門で90作品、合計228作品の応募がありました。

男女比では、短編小説部門が男性7割、女性が3割で、今回は男性の応募が多くありました。エッセイ部門では、男性が6割、女性が4割と、こちらも男性の応募が多い結果となりました。

応募者の年齢構成を見ますと、短編小説部門が25歳～86歳で、その平均は60歳でした。エッセイ部門では33歳～92歳で、その平均は63歳でした。両部門とも幅広い年齢層からの応募を全国各地域から頂戴しました。

応募作品の選考方法は次のように行われました。

まず実行委員会により、5月上旬から7月下旬までおよそ3カ月をかけて下読みを実施し、全ての応募作品を一つ一つ丁寧に読み込みました。

下読みでは、選考委員会へ推薦する際の視点として、次の4点について留意しました。

- ①「子母澤寛文学賞」「愛猿記賞」の趣旨であるヒューマニズムに溢れる作品であるかどうか。

②明るい読後感があり、未来への期待が持てるほどのぼのとした作品であるかどうか。

③小説は文章構成やストーリーの展開が巧みであり、登場人物の性格設定を際立たせる人物描写や自然描写等に工夫がみられ、登場人物を生き生きと魅力的に描かれているかどうか。

④最後まで一気に読ませる面白さがあり、多くの人たちに読んでもらいたいと感じさせる作品かどうか。

これらの4点を考慮しながら下読みを進め、下読みが終了した時点で、慎重な議論を重ねました。そして、合議の結果、今回は短編小説部門から6作品、エッセイ部門から8作品を、それぞれ推薦作品として選出し、選考委員会へ提出しました。

推薦作品は以下の通りです。

【短編小説部門】6作品（受付順）

「山王台物語」「水晶の眼」「タムシバの咲く頃」「小部屋」

「秀吉と新左衛門」「ジジババ子育て奮闘記 序章」

【エッセイ部門】8作品（受付順）

『愛猿記』ふたたび」「決意をくれた愛猿記」「一枚のメモ」

「父の手料理」「文箱の中」「鍋蓋を磨く」「三種の神器」「傷」

選考委員会において、上記の推薦作品について厳正なる審査、検討した結果、次の通り、受賞作品が決定しました。

短編小説部門では、牧子嘉丸氏の「秀吉と新左衛門」が大賞に選ばれ、木下訓成氏の「タムシバの咲く頃」が佳作に決まりました。

エッセイ部門では、箱崑八郎氏の「文箱の中」が大賞に選ばれ、葛西庸三氏の「鍋蓋を磨く」が佳作に決まりました。

今回の入賞者の特徴として、小説部門とエッセイ部門での入賞者が全員男性であったことです。前回は受賞者全員が女性でした。

今回の応募者は、全体として25歳～92歳という年齢幅でしたが、受賞者は71歳～92歳という高齢の方々でした。

【短編小説部門の選評】

「子母澤寛文学賞」大賞

牧子嘉丸氏の「秀吉と新左衛門」

牧子嘉丸氏の作品「秀吉と新左衛門」の新左衛門は、豊臣秀吉に御伽衆として仕えた人物と言われ、落語家の始祖とも言われていますが、架空の人物という説や実在はしていたが逸話は後世の創作であるとも言われていますが、本作品は、そのあたりの歴史的資料も丁寧に調べた上で書かれています。

本作品については、「秀吉に対する新左衛門の心情がよく書けている」「上方落語の源流といわれる曾呂利新左衛門を、秀吉との息をのむような丁々発止によって描いている。求心力ある表現と、読者を引き付けて離さない展開力を持っている」との評価が選考委員から寄せられました。

私の手元にある「曾呂利新左衛門」に関する物語のうち、最も古いものは、明治21年（1888年）の出版です。その後も、立川文庫などでも取り上げられるなど、多数の書籍が世に出されました。

牧子氏の本作品は、これら既存の作品にはないユニークな秀作です。

とりわけ、千利休を登場させることで、巧みな心理描写を際立たせるととも

に、終生、秀吉に忠誠を尽くした伝えられる曾呂利新左衛門の人物像を一変させているところに、独特の作品としての凄みを感じられます。

栄耀栄華を極めた天下人豊臣秀吉に仕えた新左衛門が、利休の切腹を契機として、人の世の無常を抱え、やがて病に伏す。見舞いにきた秀吉に対して、天下平定の名のもとに殺められた人々の無念を訴える。この丁々発止の中、死神が新左衛門から秀吉に乗り移り、徐々に新左衛門は病が回復に向かう一方で、逆に秀吉は死に向う。

本作品は、当委員会のホームページに掲載されていますので、是非ご一読をお勧めします。

この最後の山場に登場する千利休は、クライマックスをより効果的にするための伏線として、作品の中盤で一度登場させています。

選考委員から「利休が出てくる二つの場面が、この物語の効果的なアクセントとなり、躍動感を生んでいる。利休の人物像の描き方も魅力的で、黒ずくめの衣、大柄、大きな手、黒茶碗、真っ赤な血といった、視覚的に訴える描写が印象的です」「利休の登場する場面から、話全体が引き締り、緩急が生まれ、作品としての面白味が増しているのではないか」という作品を高く評価するコメントがありました。

「子母澤寛文学賞」佳作

木下訓成氏の「タムシバの咲く頃」

木下訓成氏の本作品については、選考委員から「過去を蘇らせながら、今の老境を描いた 86 歳の作者に強く感動した。真面目に生きてきたからこそ味わえる老境が説得力を持つ」と好評価が寄せられました。

物語は、終戦直後に幼馴染の石井太一の事故死（踏切での列車事故）という衝撃的な場面から始まります。友人・太一を失って70年以上が過ぎ、主人公の私は彼が事故にあった踏切を渡り、一緒に遊んだ《今伊勢宮》への階段をのぼりながら、過ぎ去った過去を思い出していく。

短編小説では特に主題（タイトル）が重要です。本作品のタイトル「タムシバの咲く頃」の「タムシバ」は、主人公とその妻との仲睦まじい会話に登場します。ですが、作品全体を貫く親友石井太一との友情のメタファーになっています。平地に咲くコブシに似るタムシバは、標高の高い場所に生息し、その花言葉は、まさしく「友情」です。

このタイトルに始まり、読者を作品に引き込むプロローグへと進む。巧みな構成で物語が次々に展開します。

物語の終盤で、主人公は、お宮の境内で偶然、かつて同級生だった高野俊介に出会います。学校時代から成人してからも、この高野淳介から忘れることのできない、数々の不愉快な思いをさせられてきました。彼は、主人公に決して消えることのない、幾つもの心の傷を与えた張本人です。しかし、彼の姿は、「見るからにやつれ果てて、擦り切れてしまったような風体である。白い髭は伸び放題で、皺だらけのズボンのあちこちに食べかすらしいシミがついている。」（本作品から）とあるように変貌していた。

主人公と高野俊介の二人の会話は、まるでカメラを回して撮っているような映像的な文章構成で秀逸です。ホームページに掲載されている本作品を是非、ご一読されますようお願いします。

【エッセイ部門の選評】

「愛猿記賞」大賞

箱島八郎氏の「文箱の中」

箱島八郎氏のエッセイ「文箱の中」というタイトルは、とても謎めいており、読み手に興味を持たせます。関東大震災で逃げるときに持ち出した金時絵の描かれた「文箱」、その中に入っていたのは、鼈甲の簪と土族永井鐵太郎（貧乏旗本）の二女フミの戸籍の写しであった。戸籍により、家族の系譜が、ひい祖父から祖母へ、そして母へ。その母から作者へとつながっていく。中学生の時、作者は姉から話を聞き、謎が少しずつ解け始める。永井のひい祖父の身内（兄弟）が、上野の山の戦（戊辰戦争）に参加した後、どうなったか？

後に子母澤寛氏の作品に出会い、江戸切り絵図を片手に本所深川地区を探索した。足を延ばして上野へ、そして戊辰戦争の戦死者慰霊塔へ。ついに“永井角之進”の名を見つける。エッセイの最後の文章です。

「幕府側の戦死者の中に永井角之進という名に行き当たって仰天した。

『やはり居たのだ。永井のひい祖父さんの身内が彰義隊に』

子母澤寛氏と心が繋がった一瞬だった。」

選考委員からは、「ひい祖父さんの身内永井角之進に梅谷十次郎の重ねたところが面白い」「自分と作家子母澤寛の経脈がつながることで、作家と作品に親愛を感じる自然な心の動きが表現されている」という好評がありました。

箱島氏本人にしか書けないエッセイです。これからも沢山のエッセイを書いて読者に感動を与えてくれることを期待いたします。

「愛猿記賞」佳作

葛西庸三氏の「鍋蓋を磨く」

葛西庸三氏のエッセイ「鍋蓋を磨く」の書き出しです。

「ヘルパーさんが作ってくれた料理をいただき、茶碗や鍋を洗う。

今回使用した鍋は、金色のアルミ製で、直径十四センチほどの大きさのものだ。

妻の二三子が、生前とても重宝にされていて、永年に亘って使っていた。

鍋蓋をよく見ると、二重になっている縁が濃い金色になっていた。ずっと使っているうちに、煮物の汁が溢れ出て、染みたものだ。

よし、磨こう、と思う。」

妻に先立たれた作者の日常から筆が進められます。日常の何気ない行為が、人生の長い物語を紡ぎだします。

選考委員からは「枯淡と歯切れのよい文体が、鍋蓋を洗う作者を5年前に逝った妻の思い出に誘う。素晴らしい文章だ。センテンスの簡潔さ、文末の音が単一にならない配慮。昭和5年生まれ作者。脱帽です」「なれた筆で描く亡妻への思慕。一級品」「鍋蓋を磨くといった、何気ない個人的な生活の一コマから始まる筆者の独白に、少なからずの人が人生の終盤に感じるであろう、ある種の普遍性を素直に感じました」と評価されています。

「鍋蓋を洗う」という、ある意味で映像化されたような動作から、葛西氏の歩んできた人生が読み手に伝わってきます。職場での人間関係、家庭での夫婦関係、職場と家庭との関係、人間と自然の営みの等々……。すべての関係性を想像させる優れた随筆です。